

「いやこんなのありえないじゃん、仕組みは？仕組み」

蒼は自分の理解を超えたと認識し汗がひたいから流れ落ちるのを感じ取った。
動揺は止まない。

「ないんだ、強いて言えば、神の力」

「宗教に傾倒して、物を実際に浮かした話なんて聞いたことのないぞ」

納得できない現実に青は畳み掛けて質問を続ける。声量と勢いが上がる。祖父が興奮する蒼を制止した。

「落ち着け、今はそういうものとして欲しい。世界とはそういうものだ、まだ続きがあるそのあとに質問は受け付ける」
「よしわかった、話を進めよう」

腑に落ちない状態だがこのままでは埒が明かないと感じたのか取り急ぎの返事をした。

「さて、お前は今石が浮くのを見ただろ？なので今のお前なら見えるはずだ」

祖父は紫の風呂敷を広げた。風呂敷はところどころ黒ずんでいたりとかなり古い。風呂敷が静止し、何かを唱えている。

唱えた瞬間光が部屋を包み込み目を開けたら、彼女が立っていた。

『状況把握、最適化をしています。お待ちください』

黒く長い髪をもつ彼女は緒岸と同じぐらいの年齢に見える、生気を感じさせないまま、淡々と話し始めた。
なぜか緒岸の通っている制服を着ている。

「最近のは随分と優しくなったな」

祖父は嬉しそうな口調で彼女を見上げた。

『初めまして、みなさん。』 水樹素子『と申します』

生気が入った顔になり、一言。彼女『 水樹素子』は呟いた。

「お前には彼女の管理者になって欲しい」

それに補足するように祖父は蒼に

こうして蒼の面倒な日々は幕を開けた。

本文 Repository

<https://github.com/MizukiSonoko/Story.git>

サークル名

水樹共同体

Twitter

@mizuki_sonoko